

人の手が入らなくなり、山は荒れた。広葉樹林も六〇年以上になると萌芽更新率は極端に下がってしまう。

東北では昔から、雑木林の木であるコナラやミズナラが薪として用いられてきた。コナラやミズナラは二〇〜三〇年周期で根本から伐つてやると、切り株からたくさんの芽が出て（萌芽更新）、新たに植林することなく里山が再生する。

「薪ストーブの会」はこれを実行して、伐採された木材の太いところは薪ストーブ用の薪に、中ぐらいの太さは「原木キノコの会」が原木キノコのホタギに活用し、細いところは「雁戸白炭の会」が白炭にして、資源を無駄なく使うようにし

ている。また、里山を再生させることが水源涵養機能を高めることにつながり、豊かな山や川を再生することにつながる。大規模風力発電やメガソーラーで環境を破壊する再エネビジネスに対置して、地産地消、経済の地域循環をめざすとおり、みか各地で活発になっている。

皆さまへ

先日、下関市の長周新聞より取材があり、紹介せれた記事を送ってきましたので

皆様へ紹介します。先方の承諾を得て、HP掲載もできるともことです。

参考まで皆さんにも読んでいただきたいので添付します。

川崎町の資源をいかす会 事務局 宮城